



Title	世代間移動研究における方法の再検討
Author(s)	平尾, 一朗
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1047
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【23】	
氏 名	ひら お いち ろう 平 尾 一 朗
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）
学 位 記 番 号	第 2 5 3 1 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	世代間移動研究における方法の再検討
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 川端 亮 （副査） 教 授 友枝 敏雄 准教授 吉川 徹

論 文 内 容 の 要 旨

世代間移動とは親と子といった世代の間における社会的地位の移動を意味する。多くの研究では分析対象である社会の世代間移動表を分析して、その社会における機会の平等のある・なしを判断する。本研究ではこのような世代間移動研究における方法を再検討する。本研究をテーマに従って分けるとすれば、大きく3つに分けることができる。それらは、基本的な概念と問題設定、概念や分析枠組みについての再検討、そして、統計学的な問題の発見から統計的モデルの試論である。

まず、基本的な概念と問題設定までを扱った章の概略を述べたい。第2章「基本的な概念と方法」において、同分野における一般的な概念と方法を確認する。世代間移動表がどのようなデータ構成になっており、どういったものを指しているのかを示す。そして、開放性係数を代表とする指標によるアプローチと、対数線形モデルを代表とする統計的モデルによるアプローチの基本的な考え方を述べる。

第3章「先行研究といくつかの論点」において、先行研究の要約を中心に議論を進めていく。先行研究は機会の平等に言及するかしらないか、方法が開放性係数か対数線形モデルか、により論述の作法が異なっている。先行研究を読むにあたり、このような違いは読者に混乱をもたらすかもしれない。本章ではその違いがどのように生じたのかを考察しつつ、次の2つの問いに従って先行研究をまとめた。第1の問いは機会の平等という社会規範がどのように同分野に持ち込まれたかである。ここでの考察の結果、筆者はこの考え方を自覚的に持ち込んだのは安田一郎であると考えている。第2の問いは社会的流動性の語がどのように広まったかである。結果として、この概念はJohn H. Goldthorpeらによって広められたと考えて良いように思われる。この章の最後の節において、開放性係数と対数線形モデルで実際の移動表を分析し、開放性係数ならば機会の平等化を、対数線形モデルならば機会の不平等が結論となることを確認する。

以上のような問題設定を受けて、概念や分析枠組みについての再検討を行う。第4章「機会の平等の再検討」において、機会の平等・不平等の判断の不明瞭さの理由を議論する。この章の機会の平等の再検討は3つの検討によって構成される。第1に、マクロ社会学としての世代間移動研究の検討である。Adam Swiftの完全移動批判を参考に、ミクロ、社会規範との接合の不十分さを指摘する。第2に、ミクロ水準の移動結果の検討である。社会規範との接合のため移動結果に伴う価値を社会的価値、家族的価値、個人的価値と分類する。第3に、価値の仮定によるマクロ水準の世代間移動の検討である。分類した価値を仮定して移動表の完全移動、完全非移動という類型を分析する。これらの検討の結果、移動に伴う価値を考慮すれば、移動表に対して、機会の平等を基準として想定すべきでないこと、それに対し、機会の不平等を基準として想定できることが分かった。本章では、ミクロ・マクロ・リンクの問題を改善するためのひとつの方法として、比較的观点を強調した機会の平等化・不平等化という判断の方法を示す。

第5章「『構造』移動の再検討」において、構造移動vs.循環移動の分析枠組みがどのように形成され、指標から統計的モデルへのパラダイム転換の際にどのように扱われたのかを検討する。構造移動概念は安田一郎が開放性係数を発明する過程で生み出した概念であり、開放性係数があって初めて有意味な概念である。1983年にMichael Sobelは対数線形モデルにおいて構造移動vs.循環移動の枠組みを用いるべきでない、と主張した。それは、統計学的な問題を社会学的な概念で覆い隠してしまっは、統計学的に解決できる問題も解決できなくなる、という意味ではないだろうか。この章では開放性係数の算出という目的を除いては、構造移動は用いるべきでない、という結論に達している。

最後に、統計学的な問題の発見から統計的モデルの試論までの概略を述べる。第6章「EDAの活用」において、探索的データ分析(EDA)の考え方に従い、移動表を可視化してデータを観察した。可視化した理由は同分野において社会学的な理論を含んだ議論があまりされていないためである。その結果、印象論的ではあるが、これまでに指摘されてこなかった変化する機会の不平等を捉えることができた。つまり、1940年代の男性では農業同職中心で機会の不平等があったが、1990年代の男性では中小ブルーカラー同職中心のそれへと変化していた。また、同分野の理論的な発展を阻害していたかもしれない移動表に含まれる特殊なパターンを発見した。そのパターンは空間統計学に代えは時空間的自己相関である。さらに、空間的自己相関の検定であるMoran's Iと時空間的自己相関の検定であるGriffith's STIを移動表に対して実施し、それらの存在を統計学的にも確認した。

第7章「新しいアプローチ」において、近年飛躍的に発展していると言われる空間統計学の考え方を同分野に導入する。また、空間的自己相関の検定としてのMoran's I、時空間的自己相関の検定としてのGriffith's STI、そして、統計的モデルとしての空間自己回帰モデルを取り上げる。

第8章「空間自己回帰モデルを用いたモデリングの試論」において、第1の分析では対数線形モデルが移動表に含まれる時空間的自己相関に十分に対応しているかどうかを確認するため、ラグランジュ乗数検定を実施する。その結果、対数線形モデルは時空間的自己相関への対応が不十分であることがわかった。第2の分析では時空間的自己相関への対応の前段階として、空間自己回帰モデルを用いて移動表に対するモデリングを試みる。その結果、男性と女性ともに機会の平等化傾向が示された。今後の同分野におけるモデリングでは、複数の時空間的自己相関への対応を目指すべきである、という結論に達している。

本研究を通じて明らかになった今後の課題を述べると、最も重要なことは、世代間移動表に複数個含まれる時空間的自己相関に対応した統計的モデルを構築することである。空間統計学の近年の発展は目覚ましいと言われるため、他分野との連携を模索すれば十分に解決できる問題であるはずである。このような統計学的な問題を解

決したあとの課題ではあるが、以下のような課題がある。

第1に、機会の平等化・不平等化を如何に定義するかである。機会の平等化が以前よりも進んだため、これまでに以上に議論の精度を高めていく必要がある。第2に、社会構造をどのように扱うかである。近年、必要性が認識されている制度と世代間移動レジームについての議論のために重要であると思われる。第3に、統計的モデルに拠らない素朴な移動表の解釈である。可視化された移動表の解釈は必ずしも容易ではない。その理由は、EDAの研究者であるNatalia Andrienkoによると、我々の用いる言語そのものが線形であり非線形の対象の表現が難しいためである。そのため、今後何らかの工夫が必要であると思われる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、社会移動論の中の世代間移動を扱ったものである。世代間移動は、社会移動の中でも中心の、そして社会移動研究は、階層研究の中でも中心的なテーマの一つであり、本論文は、そのような研究蓄積の多い、正統的な研究テーマに正面から取り組む、きわめて専門性の高い研究である。

世代間移動は階層研究の主要なテーマであるため、膨大な先行研究が存在する。それらは方法と価値判断によって整理されている。方法としては、開放性係数という指標と対数線型モデルに注目し、世代間移動の研究は、指標パラダイムからモデルパラダイムへと移り変わってきたとまとめる。価値判断としてとりあげるのは、「機会の平等」である。価値判断しない指標パラダイムから最終的に価値判断するモデルパラダイムへと移り変わってきた。このように方法と価値判断の二つを軸にこれまでの世代間移動研究を整理してみると、安田一郎の研究が大きな転換点となっていることが、非常に明瞭に示される。

モデルパラダイムの時代は、今からみれば、開放性係数が上昇した時代であった。現在では開放性係数で示される社会の平等がほぼ上限まで上昇しており、開放性係数が中程度であった時代やその時代からの変化に比べると、確かに近年は、安田流の機会の平等を論じる意義が減少している。さらに安田の時代と大きく異なるのは、構造移動が減少したことである。このような時代のなかで、モデルパラダイムになって、社会移動研究者の多くは、どちらかといえば構造移動を除いた循環移動、あるいはそれに相当するものに関心を示すことになった。つまり、親と本人の職業の違いをそのまま表す事実移動(絶対移動)に対する関心の低下が指摘されている。

本論文は、構造移動概念の扱いを再検討し、事実移動を従来よりも重視することによって、新しい社会移動研究を生み出そうとするものである。構造移動は除くべきものなのか、構造移動も含めて社会移動なのか、という問題である。本論文では、構造移動も含めて社会移動として取り扱うために、探索的データ分析の考え方を強調し、近年発展してきている空間統計学を導入した試論によって、新しい方向性が模索されている。

本論文の評価すべき点は、数多くの社会移動の研究をよく整理した上で、指標パラダイムとモデルパラダイムに分けて、両者による構造移動概念、機会の平等の違いを検討することで、世代間移動研究の方法上の問題点を指摘したことにある。指標パラダイムが機会の平等という結果に結びつきやすく、モデルパラダイムは機会の不平等仮説が支持される傾向にあること、構造移動概念を導入した安田の時代とは社会の状況が大きく異なっている現代において、構造概念をいかに取り扱うかについての議論など、今後さらに検討すべき課題といえるだろう。新しい方向性による試論が十分な成果をあげるにはまだ至っていないが、世代間移動研究という正統的な大きなテーマの中で、可能性を感じさせるものである。

以上のことから、本論文は博士(人間科学)の学位にふさわしいものと判定する。